

現代美術地域展開事業

「境界のかたち 現代美術 in 大府」

Imagined Boundaries: Contemporary Art in Obu

出展作家紹介

うしお Usio

1978年山形県出身。山形県拠点。



《Where Are You?》
2016年

人間同士のコミュニケーションや社会のなかで生まれる「思い通りにならない状況」に着目し、映像やインスタレーション、ワークショップなど多様な方法で制作するアーティスト。視覚障害者用に開発されたボードゲームの白黒を視覚的には判別できないようにして、晴眼者には文字どおり勝敗の白黒がつけられなくなる様子を映した《Where Are You?》や、組み合わせのカードの偶然によってお茶の味が左右されてしまうお茶会《不如意のティーサロン》など、ゲームの道具や人々があたりまえのように受け入れているイメージや言葉を再構成することで、暗黙のルールを無効にし、それを見直すことをうながす。予定調和に終わらない展開のなかで、戸惑いや躊躇いを覚えながら人がどのように人間らしく反応することができるのか、その振る舞いを批評的に考察する。

おりはら ちえ

折原 智江 Chie Orihara

1991年埼玉県出身。埼玉県拠点。



《線香の松》
2017年

多摩美術大学工芸学科で陶を学んだ後、東京藝術大学大学院先端表現科を修了。煎餅工場に生まれた作家が寿陵(生前墓)を煎餅で作った《ミス煎餅》をはじめとして、自身のルーツやバックグラウンドへのまなざしを起点に、人間の感情を動かす病や死をテーマとした作品を制作してきているアーティスト。その作品の大きな特徴は、自身の身体感覚にもとづきながら、扱う素材の特性とコンセプトとを織り交ぜるスタイルにある。他者の死に向き合うことで着想した線香で作った盆栽や、自らの呼気で炭を燃焼させる作品、涙から塩を精製した作品などでは、客観的な考察では解決困難な問いを投げかけている。個人的な体験から出発しながら、死者と自分、過去と現在などの対立をシリアスかつユーモラスに越境していく。

したみち もとゆき

下道 基行 Motoyuki Shitamichi

1978年岡山県出身。香川県拠点。



《14歳と世界と境》より
2013年

武蔵野美術大学造形学部油絵科卒業後に東京総合写真専門学校研究科を中退。砲台や戦闘機の格納庫など日本各地に残る軍事施設跡を4年間かけて調査・撮影し、出版もされた「戦争のかたち」シリーズや、アメリカ・台湾・ロシア・韓国など日本の植民地時代の遺構として残る鳥居を撮影した代表的なシリーズ「torii」など、旅やフィールドワークをベースにした制作活動で知られる。彼の作品は、風景のドキュメントでも、歴史的な事実のアーカイブでもない。生活のなかに埋没して忘却されかけている物語、あるいは些細すぎて明確には意識化されない日常的な物事を、写真やイベント、インタビューなどの手法によって編集することで顕在化させ、現代の私たちにとってもいまだ地続きの出来事として「再」提示するものである。

すずき いちたろう

鈴木 一太郎 Ichitaro Suzuki

1988年岐阜県出身。愛知県拠点。



《単眼的風景：La Marseillaise》
2014年
愛知県立芸術大学芸術資料館蔵

愛知県立芸術大学大学院博士課程前彫刻期専攻修了。「ヴァーチャルと彫刻」をテーマに、パソコンのモニター上で人々が見慣れているデジタルな画像を、現実の空間に立ち現わせるような作品を制作し、新しい彫刻のあり方について考察し続けているアーティスト。パソコンの演算処理の結果表示されているに過ぎないビット、ドットまたはピクセルと呼ばれるグリッド状の区切りを用いてイメージを表示させるが、二次元と三次元、リアルとヴァーチャル、現実と虚構など、スマホやインターネットの普及によって曖昧になっている視覚的な領域を揺さぶる作品を生み出している。

ひらかわ ゆうき

平川 祐樹 Youki Hirakawa

1983年愛知県出身。愛知県拠点。



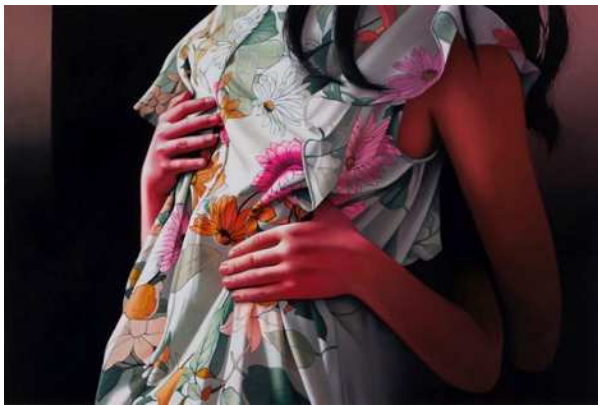
《Years Later 1918-2019》
2019年

名古屋学芸大学大学院メディア造形研究科修士課程修了。映像を中心として、写真やインスタレーション、あるいはそれら複数のメディアを組み合わせた作品を制作。場所や事物について、考古学や地質学、あるいは化学的な視点からリサーチし、それらがはらんでいる時間の流れを可視化し、硬質で静的なイメージへと結晶化させる。モチーフとなるのは、燃えている蠟燭や凍った葉など端的に経過した時間の痕跡を留める物だけでなく、「失われたフィルム」と呼ばれる古い映画の断片など、それらの固有の物語の一部をなすものである。そこでは、場所や物にまつわる記憶や失われていた歴史が詩的に呼び起こされる。

まつかわ ともな

松川 朋奈 Tomona Matsukawa

1987年愛知県出身。東京都/京都府拠点。



《それが私にできる全てだった》
2019年

© the Artist, Courtesy of Yuka Tsuruno Gallery
Photo: Ken Kato

作家自身による同世代の女性たちへのインタビューをもとに、彼女たちが社会で生きていく上で抱える不安や悲しみ、強さや弱さといった内面を織り交ぜながら写実的なスタイルで描き続けている画家。飲食店やネット上で出会った人と話し、彼女たちの身体の一部や衣服、室内の様子などをモチーフにして絵画を構成するが、登場する女性には、傷や妊娠線などの痕跡や衣服の汚れやシミなど、プライベートな事象を想起させるディテールがきわめてリアリスティックに描き出される。現代社会の構造的な問題によって不遇な立場におかれた女性たちがどのように生きるのか？ 彼女の絵画には、あらゆる女性が一人の人間として自らを肯定し、豊かに生きていく可能性への力強くストレートな願いが通底している。